

LIFE WITH GREEN

HANSHIN ENGEI *Story*

vol.08

[contents.01] 目に見えない仕事、未来の風景をつくる。

営業本部 営業部 大谷 公亮さん

[contents.02] 営業部のお仕事拝見。

[contents.03] 阪神園芸 TOPICS ブルーグリーンシステムとは？



今日もこの街のどこかで、
阪神園芸の仕事が芽吹いている

LIFE WITH GREEN

HANSHIN ENGEI *Story*

Story 8.

目に見えない仕事が、
未来の風景をつくる。

営業本部 営業部

すべては、話を聞くことから始まる

「営業の仕事は、ゼロからのスタートです」。そう話すのは、営業本部 営業部の大谷公亮さんだ。

お客さまと対話し、まだ形になっていない思いや課題を受け取り、構想を少しずつ形にしていく。デザイン室へつなぎ、設計へ落とし込み、工事へ引き渡す。そして完成後も維持管理へとつなぎながら、必要に応じて伴走する。営業の仕事は、0を1にすることでもあり、0から100まで関わり続けることでもあるという。

もともとスポーツ施設部で現場に立っていた大谷さんが、営業で最も大切にしているのが「傾聴」だ。「営業はまず、お客さんの話を聞くことから始まります。」要望の奥にある背景や不安をくみ取ることが、

その後の設計や工事にもつながっていく。

伊丹北高等学校のグラウンド整備も、そんな対話から始まった。兵庫県の事業として「ブルーグリーンシステム」を導入する学校が選ばれ、その一校に伊丹北高等学校が選定された。校長先生は当時をこう振り返る。「前任の校長のときに決まっていたのですが、「就任早々大変なお役目をいただいたな」と思いました。」体育大会や部活動への影響はないか——生徒ファーストで考えながら調整が進められていったという。

営業は何かを売る人ではなく、未来と一緒に考える聞き手。目に見えるグラウンドが生まれる前に、目には見えない対話の時間がある。



営業本部 営業部の大谷公亮さん

社内外をつなぎ、企画を育てる

対話から生まれた構想を、具体的な形へと育てていく。その過程で営業が担うのは「つなぐ」役割だ。お客さまの思いを社内へ、社内の専門性をお客さまへ。双方の間を行き来しながら、企画を少しずつ磨いていく。

その象徴となったのが、オランダ発の「ブルーグリーンシステム」だった。雨水を地中に溜め、毛細管現象によって水分を吸い上げることで表面温度を抑える仕組みで、日本ではまだ導入事例がない新しいシステムだった。

大谷さんは理解を深めるため、オランダへ渡り、実際の施工現場で研修を受けた。現地での研修で強く印象に残ったことがある。このシステムは、わずかな誤差が仕上がりを左右するという点だ。グラウンド全体の水平が

取れているか、パーツにズレがないか。少しの違いが結果に大きく影響する。「でも、阪神園芸の技術力ならやれると思いました」と、大谷さんは当時を振り返る。

もともと水はけが悪く、雨のあとにはぬかるむグラウンド。さらに夏場は遮るものがなく、暑さへの対策も必要だった。先生方はWBGT（暑さ指数）を測りながら、生徒の安全を守る工夫を続けていたという。実績のない新しいシステムをどう伝えるか、調整は簡単ではなかっただろう。それでも大谷さんは現場の先生方の声を受け止めながら説明を重ね、少しずつ理解を広げていったという。営業が社内外をつなぐことで、新しい選択肢が現実のものになっていった。



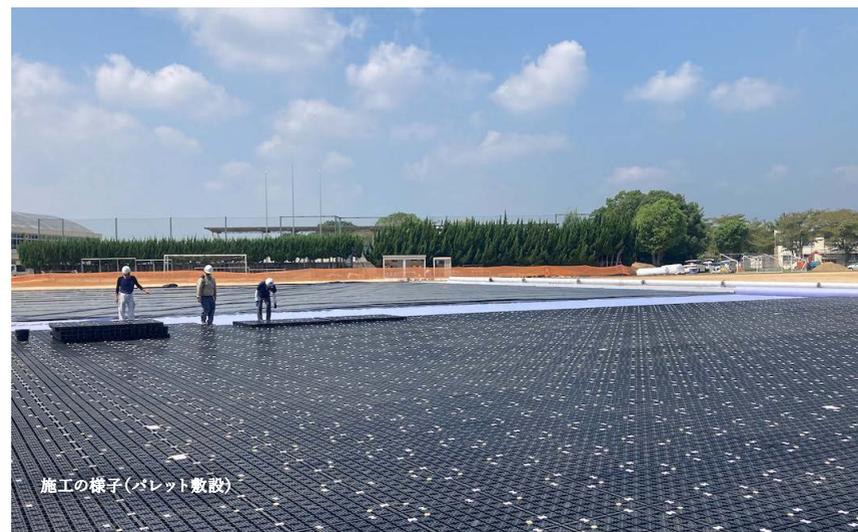
兵庫県伊丹北高等学校の宮本稚子校長(写真中央)と中村薫事務長(写真左) ※2026年2月取材当時



オランダ・ヘラクレススタジアムで技術指導を受けている様子



「ブルーグリーンシステム」の断面サンプル



施工の様子(パレット敷設)



サッカー部の部活の様子。「ボールの走りが良くて使いやすい!」との声も



下層にクッション材が入っているので、生徒の足にも優しい仕様だ



完成してからが、本当のスタート

グラウンドが完成したときのことを、大谷さんは「率直にうれしかった」と振り返る。青々と広がる人工芝。その上で生徒たちがのびのびとプレーしている姿を見て、「この設備をもっと広めていきたい」と自然に思えたという。

引き渡し前日は生憎の大雨だったが、以前ならぬかるんで使えなかった場所で、問題なくサッカーができた。事務長先生も「すごいシステムだなと思いました」と話す。夏の暑さについてはこれからだが、「この夏が楽しみ」という期待の声も聞こえてきている。

しかし、大谷さんはこう言う。「営業の仕事は、完成して終わりではないんです。」グラウンドは、使い続けることで状態が変わっていく。だから

こそ設置後も現場に足を運び、プロの視点から気づいたことを伝える。必要があれば相談に乗り、改善へとつなげていく。

実際、学校からの問い合わせには迅速に対応し、細かな要望にも耳を傾けてきた。その積み重ねが少しずつ信頼関係を育てている。

校長先生は「環境が人を育てると言われますが、人が環境を整えることも大切だと思います」と語った。このグラウンドがこれからどのように使われ、どんな時間を刻んでいくのか。それは学校や地域の手に乗ねられている。営業の仕事は目立たない。けれど、誰かが安心して使える場所を支え続ける。目に見えない仕事は、未来の風景を支えている。

0から100まで関わる

営業部の お仕事拝見。

クライアントの想いに耳を傾け、プロジェクトの最初の一步をつくる営業部。その仕事に密着！兵庫県の学校グラウンド整備プロジェクトを例に、大谷さんの仕事の流れや、営業として大切にしていることを聞きました。

ORDER

兵庫県の事業として「ブルーグリーンシステム」を導入する学校に、伊丹北高等学校が選ばれた。施工を担うのは阪神園芸。その窓口として学校とのやり取りを担うことになったのが、営業部の大谷さんだ。

教えてくれた人



営業本部 営業部 大谷公亮さん
クライアントの声を丁寧に聞き取り、社内外をつなぎながらプロジェクトを形にしていく営業を担当。

POINT

いつでも相談できる存在に

調整や工事の期間中、学校からの質問や不安にはその都度対応。こまめな連絡を重ねながら、安心して任せてもらえる関係を築いた。



学校側の窓口としてご尽力くださった
中村 薫 事務長

工事に関する質問があって、大谷さんにメールすることが多かったんですが、毎回すぐに返信を下さるので安心感がありました。

ヒアリング・企画フェーズ

ブラッシュアップフェーズ

工事フェーズ 伴走フェーズ

1

ヒアリング

2

事前調査・測量

3

設計案・工事計画の作成

4

教育委員会・学校へ提案

5

関係先との調整

6

調整案の提示

7

最終設計

8

工事

9

引渡し

メンテナンス・サポート

POINT

生徒ファーストの工事計画

体育大会や部活動に影響が出ないよう工事の時期を調整しながら、先生方の声を丁寧に聞き取り、学校と一緒に進め方を考えた。

POINT

学校生活に配慮した工事を

授業や部活動に支障が出ないよう、作業時間や動線に配慮。安全面にも気を配りながら、学校と連携して工事を進めた。

POINT

完成してからが本当のスタート

完成して終わりではなく、その後も学校と連絡を取りながらメンテナンスや相談に対応。長く安心して使える環境を支えていく。

阪神園芸 TOPICS

雨水でグラウンドの暑さを抑える？
オランダ発の新しい仕組みとは

次世代型グリーンインフラ「ブルーグリーンシステム」を導入

阪神園芸はオランダ発祥の都市インフラ技術「ブルーグリーンシステム」を2024年に導入しました。主にスポーツフィールドで活用されている仕組みで、雨水を地下に溜めて循環させることで、ヒートアイランド現象や都市型洪水といった現代都市課題に対応するものです。

本システムの導入にあたり、阪神園芸は2024年にオランダで研修を実施。スタジアム建設の現場で施工方法を学びました。高い施工精度が求められるシステムですが、スポーツフィールドづくりで培ってきた阪神園芸の技術力を生

かし、導入を実現しました。

今回導入した兵庫県内の高校のグラウンドでは、地下に「パーマヴォイド85S」と呼ばれるパレットを敷き、その中に雨水を貯留。そこから毛細管現象によって水分を吸い上げ、「キャピラリーコーン」や「ショックパッド」を通して地表へと循環させる仕組みを組み込みました。充填材には砂を使用し、水分の蒸発によって表面温度を抑える効果も期待されています。実際に導入した学校から、「足裏の熱さが軽減された」といった声もあがっています。

兵庫県立伊丹北高等学校 サッカーピッチ

導入例



case01 兵庫県立社高等学校 サッカーピッチ

水はけの悪さと、硬く膝に負担がかかることが課題でした。本システムを導入した結果、グラウンド利用が増え、体育・部活動の充実や競技力向上に寄与。表面温度も下がり、熱中症リスクも軽減されました。



case02 兵庫県立星陵高等学校サッカーピッチ

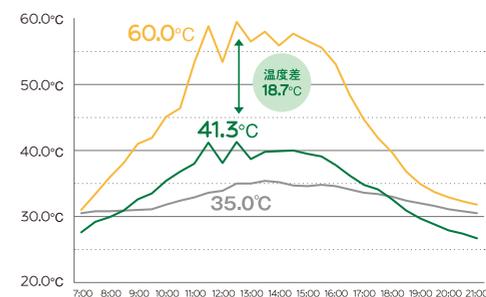
雨天後にグラウンドが使えない状況を改善するため本システムを導入。使用時間が大きく増え、環境配慮型ピッチの先進事例に。残土を出さない施工で処分費と環境負荷の削減にもつながりました。

POINT

01 雨水が、表面温度を下げる

ためた雨水が蒸発することで人工芝の温度上昇を抑えます。足裏の熱さやスライディング時のやけどの心配を軽減し、熱中症対策にもつながります。

人工芝の表面温度



POINT

02 衝撃をやわらげ、身体への負担を軽減

従来的人工芝はアスファルト下地のため硬く衝撃が大きいのにに対し、本システムはパレット構造とショックパッドで衝撃をやわらげます。膝や腰への負担を抑え、天然芝のような快適さに。

POINT

03 環境に配慮した、持続可能なフィールドへ

充填材に自然由来の珪砂を採用し環境負荷を低減。表面をフラットに整え流出を抑え、マイクロプラスチックの発生も防止します。また、雨水を一時貯留し、豪雨時にも対応するグリーンインフラです。

現場
だより

ゲンバサミット



若手の声から職場を変えていくプロジェクト
「ゲンバサミット」が始動しました!

若手社員が中心となり、
社内のコミュニケーションを活性化させる
新たなプロジェクト「ゲンバサミット」がスタートしました。
部署を越えて集まった20代メンバーが主体となり、
「働きやすさ」をテーマに職場改善や
制度づくりに取り組みます。
月に一度の対話を重ねながら、
アイデアを形にし、社内外へ発信。
日々のつながりを育みながら、
より良い職場環境と企業の魅力向上を目指していきます。



阪神園芸株式会社

本 社 〒663-8165 兵庫県西宮市甲子園浦風町16番24号
TEL.0798-47-3538 FAX.0798-41-4116
URL <https://www.hanshinengei.co.jp/>

大 阪 支 店 〒567-0884 大阪府茨木市新庄町14番17号
TEL.072-630-0161 FAX.072-630-0171

東 京 支 店 〒140-0013 東京都品川区南大井6丁目24番14号
TEL.03-6404-6236 FAX.03-5767-6593



阪神園芸

2026年3月発行